

## はじめに

研究及び開発（以下「研究開発」）は、研究分野の深化・融合化や大規模化等の方向に加えて、社会的・経済的な要請や国民への成果還元のために、より効果的で効率的な推進が求められています。そのため、評価対象が拡大している中、実施する評価の水準も高度なものが必要となってきました。そのため、評価システムの改革が求められています。

文部科学省科学技術・学術政策局評価推進室では、こうした状況を踏まえて平成15年度より、特に現場における研究開発評価の実態と課題を把握するための現地調査を各機関のご協力のもと実施してきており、その中で把握できた様々な課題の解決に向けた支援事業を推進しています。

本主旨に基づき、より多くの研究開発機関における研究開発評価の効率化及び充実を促進するとともに、評価関係者の評価意識の向上や評価関係者同士の連携促進を目的として、昨年度に引き続きシンポジウムを企画・開催いたしました。

なお、昨年度までに実施した現地調査を通して、評価の仕組み作りにおいては「活かされる評価」の重要性を再認識し、今年度は、この「活かされる評価」の実現のため、研究開発評価とマネジメントとの関係、特に「研究開発マネジメントに活かす評価」に重きを置き、19研究機関等に現地調査のご協力をいただきました。

本シンポジウムでは、「研究開発マネジメントに活かす評価へ」というテーマで、その観点で分かりやすいあるいは特徴ある研究開発評価を実施している4機関の実例を、仕組みを構築していくこととなった「きっかけ」や構築及び運用にあたって工夫した点、問題となったこと、今後の課題についてもふれてご紹介いただくとともに、パネルディスカッションでは、参加者を交えての意見交換を行いました。

この度、本シンポジウムの概要をとりまとめた報告書を作成いたしましたので、シンポジウムに参加できなかった方々にご一読いただき、また、参加された方々でも本報告書を見て新たな気づきをされて、各研究機関等の研究開発評価活動の充実を図っていく際の参考にしていただければ幸いです。

末尾になりましたが、本シンポジウムにおいて実例をご紹介いただきました独立行政法人物質・材料研究機構の野田哲二様、独立行政法人放射線医学総合研究所の相澤志郎様、大学共同利用機関法人自然科学研究機構分子科学研究所の西信之様、国立大学法人名古屋大学エコトピア科学研究所の松井恒雄様、パネルディスカッションのモデレーターを務めていただきました一橋大学の伊地知寛博様、パネリストとしてご参加いただきました筑波大学の小林信一様、大阪市立大学の永田潤子様、本シンポジウムの企画・実施にご尽力いただきました研究開発評価推進検討会の委員の皆様、本シンポジウムにご参加いただきました参加者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成19年5月

文部科学省 科学技術・学術政策局 評価推進室